

種蒔く人……在来種を自家採種するネットワーク

# 岩崎政利さんの話 その5「種の旅」

## Report

### ■外国の種が根付くこと

アブラナ科の種って、ものすごく小さい、カブなんかもっと小さい。その種がですよ、自らの中の全てが、あの小さな種のなかにたくさんの情報がつまっている。私は種に予知能力とかすばらしい力があって、それは農家によって変えることができると、今までの経験から感じています。

たくさんの外国の種が私のところに試作を依頼されてますけれども、もらった年はほとんど生育をせずに、その力を発揮しない。中国の方とも種苗交換をして、たくさんの農家が試作をしますが、結果的にほとんどの野菜の特徴が出ないまま。

しかし私はもう一回自分で種をとってみようということで、次の年種を蒔いたんです。そうすると今度は見違えるように姿を変えてくる。やはり種というのは、育つ風土とかそういう情報を詰める能力がある。そのことが自家採種のなかで非常に大切なことだと。繰り返しその地域で種を取り続けていくことの大切さを、外国の種を依頼されるたびに、感じているわけです。

### ■種を旅に出そう

私は外国の種であっても、有機農業に向いていけば、日本にないものも逆に生かされるということで大切に守っています。ぜひ日本の種だけ



定方正彦さん(利根川みどりの会・群馬県)がつくっている尾島ネギ。定方さんも在来種にこだわるひとりだ

でなく、門戸を広げて、遺伝子を守るためにこれからもいろんなものを試作していきたいなあと感じています。

種とはまさに門外不出の大切なものですがけれども、私は門外不出の種であってもなるべく人にあげるようにしているんですよ。種というのは、人類みな共有物ではないかと、たくさんの人に守られていくものではないかと、そんな気がします。どんなにその地域にはすばらしいものであっても、風土と人が変われば、同じものはできないはずですから、あまりかたくなに自分のものとして守っていくのもどうかと、なるべくたくさんの人に私はあげるように、そして皆で守っていくということでやっています。

### ■風土にあった種を育てる

3年前に三重県のある高校で関西の有機農業生産者が自家採種の勉強会をしたいということで、私の種を預けて、生徒が先に種を蒔いて、自家採種の勉強会の時に収穫できるように栽培してたんですけども、さすがに長崎と違って三重は寒いなあ、寒さにこごえながら学習会をしました。

ところが同じ種がたった1年でですね、私の長崎で育ってる姿とたった一作で違ってきてるんですよ。青首大根が、一作でもう三浦大根のように肩がなくなって、寒さに耐えようとする姿を見たときにびっくりしまして、わあ、これはすごい植物の本能だな、と。ちゃんと野菜という

前回の「門外不出の種」に続き、今回は「種の旅」のお話です。現在市場に出回っている野菜のルーツをたどると、日本古来の野菜はむしろ少なく、そのほとんどは外国が原産。長い時間作り継がれてその土地になじんでいった日本の野菜は、思えば距離的にも時間的にも、気の遠くなるほどの長い旅をしてきました。その旅は今も続いています。



岩崎さんの種取りハウス。6月にお伺いしたときは、春播き野菜のタネがとところ狭しと乾燥中だった

のはその風土に合おうとしている。野菜は風土で姿を変えようとしている、それがその種のすごさ、大切なところ。

野菜は風土で姿を変える、と私は思っているんですけども、農家が、その風土にあったものを育てるには、種を育てなければ、その風土にあったものはできない、その風土にあった種で育てるからこそ、風土にあったおいしいものができるのだと思うのです。

私の畑ではできの悪い天王寺カブとか、三浦とか、畑菜とか、私の畑ではだめだったものが、すばらしい姿に、あ、これはこの地のものだから、この地に向いていたんだな、と。種というのは風土で形を変えるし、また種を増やしていきます。それを知ったときに、また種のすごさ、大切さを感じました。これも種の旅なわけです。

●生育が揃わない品種の多い固定種。その短所をかけがえのない個性として受け入れ、一作ごとの出来不出来のものさしとは別に、これを種の長い旅のひとつとして捉え直して、その生命力を最大限に引き出すことに大切さを感じているのだと思われま。

(事務局・竹内)